

# Document made available under the Patent Cooperation Treaty (PCT)

International application number: PCT/JP05/006132

International filing date: 30 March 2005 (30.03.2005)

Document type: Certified copy of priority document

Document details: Country/Office: JP  
Number: 2004-313639  
Filing date: 28 October 2004 (28.10.2004)

Date of receipt at the International Bureau: 12 May 2005 (12.05.2005)

Remark: Priority document submitted or transmitted to the International Bureau in compliance with Rule 17.1(a) or (b)



World Intellectual Property Organization (WIPO) - Geneva, Switzerland  
Organisation Mondiale de la Propriété Intellectuelle (OMPI) - Genève, Suisse

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 Date of Application: 2004年10月28日

出願番号 Application Number: 特願2004-313639

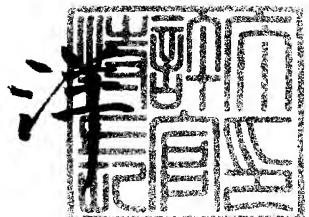
パリ条約による外国への出願に用いる優先権の主張の基礎となる出願の国コードと出願番号  
The country code and number of your priority application, to be used for filing abroad under the Paris Convention, is

出願人 Applicant(s): 株式会社ソミック石川

2005年4月20日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

小川



【書類名】 特許願  
【整理番号】 SP-20-513  
【あて先】 特許庁長官殿  
【発明者】  
【住所又は居所】 東京都墨田区本所1丁目34番6号 株式会社ソミック石川内  
【氏名】 菅野 秀則  
【発明者】  
【住所又は居所】 東京都墨田区本所1丁目34番6号 株式会社ソミック石川内  
【氏名】 志村 良太  
【発明者】  
【住所又は居所】 東京都墨田区本所1丁目34番6号 株式会社ソミック石川内  
【氏名】 板垣 正典  
【特許出願人】  
【識別番号】 000198271  
【氏名又は名称】 株式会社ソミック石川  
【代理人】  
【識別番号】 100073139  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 千田 稔  
【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 011796  
【納付金額】 16,000円  
【提出物件の目録】  
【物件名】 特許請求の範囲 1  
【物件名】 明細書 1  
【物件名】 図面 1  
【物件名】 要約書 1  
【包括委任状番号】 0203076

【書類名】特許請求の範囲

【請求項 1】

粘性流体が充填されたケーシング内において、該ケーシングに対して相対的に回転し得る軸と、該軸の周囲に設けられるペーンとを有するロータリーダンバであって、

前記ペーン又は該ペーンが配設される室を仕切る隔壁に、前記粘性流体が通過し得る作動室と、該作動室内において移動し得る弁体と、該弁体が一方向に移動するときに該弁体に制動力を付与するばねとを有し、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の周壁との間に形成される流路の長さを、前記弁体が一方向に移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とするロータリーダンバ。

【請求項 2】

粘性流体が充填されたケーシング内において該ケーシングに対して相対的に回転し得る軸と、該軸の周囲に設けられるペーンとを有するロータリーダンバであって、

前記ペーン又は該ペーンが配設される室を仕切る隔壁に、前記粘性流体が通過し得る作動室と、該作動室内において移動し得る弁体と、該弁体が一方向に移動するときに該弁体に制動力を付与するばねとを有し、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の周壁との間に形成される流路の面積を、前記弁体が一方向に移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とするロータリーダンバ。

【請求項 3】

粘性流体が充填されたケーシング内において該ケーシングに対して相対的に回転し得る軸と、該軸の周囲に設けられるペーンとを有するロータリーダンバであって、

前記ペーン又は該ペーンが配設される室を仕切る隔壁に、前記粘性流体が通過し得る作動室と、該作動室内において移動し得る弁体と、該弁体が一方向に移動するときに該弁体に制動力を付与するばねとを有し、負荷が所定値に達するまでは、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の周壁との間に形成される流路の面積を、前記弁体が一方向に移動することにより変化させ、負荷が所定値以上のときは、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の周壁との間に形成される流路の長さを、前記弁体が一方向に移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とするロータリーダンバ。

【書類名】明細書

【発明の名称】ロータリーダンバ

【技術分野】

【0001】

本発明は、負荷の変化に対応して制動力を変化させることができるロータリーダンバに関するものである。

【背景技術】

【0002】

例えは、特開2004-3584号公報には、ベーン又は隔壁に、板ばねからなる弁体を配設し、該弁体により、流体通路を通過する粘性流体の流量を、負荷の変化に対応して調節可能としたロータリーダンバが開示されている（同公報に記載された発明の実施例2（段落番号0042-0053、図7-図11）を参照）。

【0003】

上記ロータリーダンバにおける弁体は、一面側が突出するように撓められており、その一面側に粘性流体の圧力を受けることにより変形して、粘性流体が通過する流路の大きさを変化させることができる。上記ロータリーダンバによれば、かかる弁体により、負荷に応じて流体通路を通過する粘性流体の流量を制限できるため、負荷の変化に対応して制動力を変化させることができる。

【0004】

しかしながら、上記弁体では、弁体によって閉塞される流体通路の開口部と、その開口部に対向する弁体の他面との直線距離が短いため、対応し得る負荷の範囲が小さいという問題がある。また、上記弁体では、負荷が一定値に達すると、急激に変形して流体通路を閉塞してしまうという問題がある。さらに、上記弁体は曲げ加工されるものであるため、量産した場合に、個々の弁体を均一の形状に成形することが容易ではなく、形状の僅かな誤差が制動特性の優劣に大きな影響を及ぼしてしまうという問題がある。

【0005】

【特許文献1】特開2004-3584号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0006】

本発明は上記事情に鑑みなされたものであり、歩留まりと制動特性の双方を向上させることができるロータリーダンバを提供することを課題とする。

【課題を解決するための手段】

【0007】

本発明は、上記課題を解決するため、以下のロータリーダンバを提供する。

（1）粘性流体が充填されたケーシング内において、該ケーシングに対して相対的に回転し得る軸と、該軸の周囲に設けられるベーンとを有するロータリーダンバであって、

前記ベーン又は該ベーンが配設される室を仕切る隔壁に、前記粘性流体が通過し得る作動室と、該作動室内において移動し得る弁体と、該弁体が一方向に移動するときに該弁体に制動力を付与するばねとを有し、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の隔壁との間に形成される流路の長さを、前記弁体が一方向に移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とするロータリーダンバ。

（2）粘性流体が充填されたケーシング内において該ケーシングに対して相対的に回転し得る軸と、該軸の周囲に設けられるベーンとを有するロータリーダンバであって、

前記ベーン又は該ベーンが配設される室を仕切る隔壁に、前記粘性流体が通過し得る作動室と、該作動室内において移動し得る弁体と、該弁体が一方向に移動するときに該弁体に制動力を付与するばねとを有し、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の隔壁との間に形成される流路の面積を、前記弁体が一方向に移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とするロータリーダンバ。

（3）粘性流体が充填されたケーシング内において該ケーシングに対して相対的に回転

し得る軸と、該軸の周囲に設けられるベーンとを有するロータリーダンパであって、

前記ベーン又は該ベーンが配設される室を仕切る隔壁に、前記粘性流体が通過し得る作動室と、該作動室内において移動し得る弁体と、該弁体が一方向に移動するときに該弁体に制動力を付与するばねとを有し、負荷が所定値に達するまでは、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の周壁との間に形成される流路の面積を、前記弁体が一方向に移動することにより変化させ、負荷が所定値以上のときは、負荷の変化に対応して、前記弁体と前記作動室の周壁との間に形成される流路の長さを、前記弁体が一方向に移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とするロータリーダンパ。

#### 【発明の効果】

##### 【0008】

前記(1)に記載の本発明によれば、負荷の変化に対応して、弁体と作動室の周壁との間に形成される流路の長さを、弁体が一方向へ移動することにより変化させる構造であるため、対応し得る負荷の範囲を拡大することが可能になるとともに、負荷の変化に適切に対応した制動力を発揮することが可能になる。さらに、量産した場合でも、弁機構として、個々の弁体等の形状・寸法について高精度に加工し易いものを採用し得るため、歩留まりを向上させることが可能となる。

前記(2)に記載の本発明によれば、負荷の変化に対応して、弁体と作動室の周壁との間に形成される流路の面積を、弁体が一方向へ移動することにより変化させる構造であるため、対応し得る負荷の範囲を拡大することが可能になるとともに、負荷の変化に適切に対応した制動力を発揮することが可能になる。さらに、量産した場合でも、弁機構として、個々の弁体等の形状・寸法について高精度に加工し易いものを採用し得るため、歩留まりを向上させることが可能となる。

前記(3)に記載の本発明によれば、負荷が所定値に達するまでは、負荷の変化に対応して、弁体と作動室の周壁との間に形成される流路の面積を、弁体が一方向に移動することにより変化させる構造であるため、負荷の大きさが変化しても、その負荷が所定値に達するまでは、負荷に対応して、流路の面積が変化することになる。ここで、流路の面積が変化するとは、流路を形成する開口面の面積が変化するということであるから、流路の長さは、その開口面を形成する分の長さとなり極めて短い。従って、流路の面積が変化するときは、流路の長さが変化するときと比較して、粘性流体が流れ易くなるので、負荷が所定値に達するまでの低負荷の状態では、負荷の変化に対応した制動力を発揮するけれども、その制動力を総じて小さいものとすることが可能になる。一方、負荷が所定値以上のときは、負荷の変化に対応して、弁体と作動室の周壁との間に形成される流路の長さを、弁体が一方向に移動することにより変化させる構造であるため、負荷が所定値以上のときは、負荷の変化に対応して、流路の長さが変化することになる。ここで、流路の長さが変化するとは、流路を形成する隙間全体の長さが変化するということであるから、流路の長さが変化するときは、流路の面積が変化するときと比較して、粘性流体が流れ難くなる。従って、負荷が所定値以上の高負荷の状態では、負荷の変化に対応した制動力を発揮するけれども、その制動力を総じて大きいものとすることが可能になる。

従って、本発明によれば、制御対象物の回転モーメントが変化した場合でも、その動作時間の変動をより小さくすることが可能になる。

#### 【発明を実施するための最良の形態】

##### 【0009】

以下、本発明の実施の形態を図面に示した実施例に従って説明する。

##### 【実施例1】

##### 【0010】

図1及び図2は、本発明の実施例1に係るロータリーダンパを示す図であり、図1は内部構造を示す断面図、図2は図1におけるA-A部断面図である。これらの図に示したように、本実施例に係るロータリーダンパは、ケーシング10、軸20、ベーン30、隔壁40及び弁機構を有して構成される。

##### 【0011】

ケーシング10は、ケース本体11と蓋12とを有して構成される。ケース本体11は、断面略円形の外壁11aと、外壁11aに直交する端壁11bと、断面略円形であって、端壁11bに直交する内壁11cとを有して構成される（図1参照）。ここで、内壁11cの外径は、内壁11cの外周面と、これに対向する外壁11aの内周面との間に空間が形成されるように外壁11aの内径よりも小さく形成されている。また、内壁11cの軸方向長さは、外壁11aの軸方向長さよりも短く形成されている。

#### 【0012】

ケース本体11には、外壁11aの外周面から突出する鍔部11dが設けられており、この鍔部11dには、突起11eが設けられている。突起11eは、ケーシング10の回り止めとして機能させることができる。

#### 【0013】

ケース本体11には、また、外壁11aの内周面から突出する2つの隔壁40、40が設けられている（図2参照）。各隔壁40、40は、軸20を挟んで互いに向き合うように配置され、先端面が軸20の外周面に接するように形成されている。各隔壁40、40は、ケーシング10と軸20との間に形成される空間を仕切り、これにより、ケーシング10内には、2つの室50、50が形成される（図2参照）。各室50、50には、粘性流体が充填される。粘性流体としては、シリコンオイル等を用いることができる。

#### 【0014】

蓋12は、中央に穴の開いた円形のプレートからなり、穴の周囲には、蓋12の内面側に突出する周壁12aが形成されている（図1参照）。この蓋12は、ケース本体11内に後述する軸20、ペーン30、弁機構等を組み込み、粘性流体を充填した後、穴の周壁12aを軸20に形成された溝20bに挿入し、ケース本体11の一端側に形成される開口部を閉塞するようにセットされ、その後、外壁11aの端部をかしめることにより、取り付けられる（図1参照）。本実施例における蓋12は、ケース本体11の一端側に形成される開口部を密閉する役割だけでなく、蓋12に形成された穴の周壁12aが、軸20に形成された溝20bにはめ込まれた形で取り付けられることにより、軸20を支持する役割も果たしている。

#### 【0015】

軸20は、ケーシング10内において、ケーシング10に対して相対的に回転し得るように設けられる。本実施例における軸20は、断面略円形であって、軸心に沿って貫通する断面略方形の孔部20aを有する。軸20の周囲には、軸20と一体成形された2つのペーン30、30が設けられている。各ペーン30、30は、軸20を挟んで対峙するように設けられ、ケーシング10内に形成された2つの室50、50に、それぞれ配置される。これにより、各室50、50には、ペーン30によって区画された圧力室51と非圧力室52がそれぞれ形成される（図2参照）。

#### 【0016】

各ペーン30、30には、それぞれ弁機構が設けられる。弁機構は、作動室61、弁体62及びばね63を有して構成される（図1参照）。作動室61は、ペーン30を軸方向に貫通するように形成され、第1通路64を介して圧力室51と連通し、また、第2通路65を介して非圧力室52と連通している（図2参照）。従って、圧力室51内の粘性流体は作動室61を通過して非圧力室52内へ移動でき、また、非圧力室52内の粘性流体も作動室61を通過して圧力室51内へ移動できるようになっている。作動室61は、ペーン30の一端側に開口する大孔部61aと、大孔部61aに隣接し、大孔部61aよりも内径が小さい小孔部61bとを有して構成される（図1参照）。

#### 【0017】

弁体62は、作動室61内において、軸方向に移動し得るように設けられる。本実施例における弁体62は、作動室61の大孔部61aの内径よりも小さい外径を有する大径部62aと、作動室61の小孔部61bの内径よりも僅かに小さい外径を有する小径部62bとを有して構成される（図3参照）。大径部62aの一端には、端面から突出する凸部62cが形成されている。この凸部62cは、大径部62aによって第1通路64が閉鎖

されることを防ぐ役割を果たすものである。

#### 【0018】

ばね63は、圧縮コイルばねからなり、作動室61の大孔部61a内において、一端が弁体62の大径部62aと小径部62bとの境界面に支持され、他端が作動室61の大孔部61aと小孔部61bとの境界面に支持されるように設けられている。ばね63は、弁体62が一方向に移動するとき（弁体62の小径部62bが作動室61の小孔部61bに進入して行くとき）に圧縮され、この時に生じるばね63の応力が制動力として弁体62に付与されるようになっている。

#### 【0019】

本実施例に係るロータリーダンバは、ケーシング10を回転不能に設置した場合には、ケーシング10内で軸20が回転することにより制動力を発揮する一方、軸20を回転不能に設置した場合には、軸20の周りでケーシング10が回転することにより制動力を発揮するものであり、かかる制動力により、制御対象物の動きを緩慢なものとさせることができる。

#### 【0020】

例えは、ケーシング10を回転不能に設置した場合、軸20の孔部20aには、制御対象物の動きに連動して回転する連結軸が挿通され、該連結軸に軸20が連結される。これにより、軸20は、制御対象物の動きに伴い回転することになる。

#### 【0021】

図2において、軸20が時計回り方向へ回転すると、圧力室51内の粘性流体がペーン30に押圧されることにより、第1通路64を通じて作動室61の大孔部61a内に流入する。弁体62は、その背後に流れ込む粘性流体の圧力を受けて、一方向へ移動しようとするが、ばね63の働きにより、その移動距離は、負荷に応じたものとなる。すなわち、負荷が大きければ、弁体62を一方向へ移動させる粘性流体の圧力も大きくなるため、ばね63は大きく圧縮され、弁体62の移動距離も長くなる。一方、負荷が小さければ、弁体62を一方向へ移動させる粘性流体の圧力も小さくなるため、ばね63の圧縮は小さなものとなり、弁体62の移動距離も短くなる。

#### 【0022】

弁体62が一方向へ移動すると、図4に示したように、弁体62の小径部62bが作動室61の小孔部61bに進入する。これにより、小径部62bの外周面と小孔部61bの内周面との間には、流路70が形成される（図5参照）。流路70は、そこを粘性流体が通過する際に、粘性流体に抵抗を生じさせる通路であって、流路70の長さが長くなる程、又は流路70の面積が小さくなる程、粘性流体の抵抗が大きくなる。本実施例における小径部62bと小孔部61bの組み合わせは、流路70の面積は一定でその長さを変化させる構成である。そして、本実施例では、弁体62の移動距離は負荷の変化に対応して変化するため、流路70の長さLも負荷の変化に対応して変化することになる。従って、本実施例に係るロータリーダンバによれば、負荷が大きいときには、流路70の長さLが長くなり、粘性流体の抵抗も大きくなるため、大きな制動力を発揮することができ、逆に負荷が小さいときには、流路70の長さLが短くなり、粘性流体の抵抗も小さくなるため、小さな制動力を発揮することができる。なお、圧力室51から第1通路64を通じて作動室61内に流入した粘性流体は、第2通路65を通じて非圧力室52内へ流入する。

#### 【0023】

図6は、板ばねからなる弁体を備えた従来のロータリーダンバ（比較例）の制動特性と本実施例に係るロータリーダンバ（実施例1）の制動特性を比較したグラフである。縦軸は制御対象物が一定角度回転動作したときの動作時間（以下、単に「動作時間」という。）を示し、横軸は制御対象物の回転モーメント（以下、単に「回転モーメント」という。）を示す。比較例と本実施例は、回転モーメントが50N・mのときに、動作時間が同一となるように設定されている。

#### 【0024】

このグラフに示されるように、回転モーメントが5N・mのときに、比較例では、流体

通路の開口部と、その開口部に対向する弁体の他面との直線距離が当初からあまり長くないため、制御対象物が一定角度回転するのに、約5.3秒要している。これに対し、本実施例では、ばね63の働きにより、弁体62の移動量が少ないため、動作時間が約1.8秒と、比較例の約3分の1の時間しか要していない。

#### 【0025】

回転モーメントが10N・mになると、比較例では、弁体が変形して、流体通路の開口部と弁体の他面との直線距離が短くなるため、動作時間が約2.4秒に短縮される。これに対し、本実施例では、弁体62が一方向へ移動して、弁体62と作動室61の周壁との間に流路70が形成されるため、動作時間が約1.2秒に短縮される。

#### 【0026】

回転モーメントが15N・mのときには、比較例では、弁体がさらに変形して、流体通路の開口部と弁体の他面との直線距離が短くなるため、動作時間が約1.7秒に短縮される。もっとも、回転モーメントが10N・mのときの動作時間と比較すると、その差が約0.7秒と、大きく変化している。これは、弁体の変形の度合いが大きいことによるものである。これに対し、本実施例では、弁体62が一方向へさらに移動して、流路70の長さが長くなるため、動作時間が約1.17秒に短縮されるが、回転モーメントが10N・mのときの動作時間と比較すると、その差が僅か約0.03秒であり、動作時間の変化は非常に小さい。

#### 【0027】

回転モーメントが20-25N・mのときには、比較例でも、本実施例と同様に、回転モーメントが15N・mのときと比較して、動作時間にほとんど差は生じていない。

#### 【0028】

しかしながら、回転モーメントが30N・mになると、比較例では、弁体が急激に変形して、流体通路の開口部を閉塞してしまうため、動作時間が急激に増加する。そして、回転モーメントが30N・mを超えて、50N・mに至るまでは、弁体が流体通路の開口部を閉塞した状態が継続されるため、弁体は機能せず、ペーンとケーシングとの間に形成される隙間等を通じて粘性流体が移動することにより生じる粘性流体の抵抗によって、動作時間が次第に短くなっている。これに対し、本実施例では、回転モーメントが30N・mになってしまっても、弁体62が一方向へさらに移動して、流路70の長さは長くなるが、流路70が閉塞されることはないため、動作時間は増加することもなくわずかに短くなる。そして、回転モーメントが30N・mを超えて、50N・mに至るまでは、弁体62の更なる移動によって、流路70の長さが徐々に長くなっているため、動作時間は次第に短くなっていくが、回転モーメントの増加に対する動作時間の変化は非常に小さい。

#### 【0029】

このように、本実施例によれば、負荷の変化に対応して、弁体62（小径部62bの外周面）と作動室61の周壁（小孔部61bの内周面）との間に形成される流路70の長さを、弁体62が一方向へ移動することにより変化させる構造であるため、弁機構の働きにより実質上対応し得る負荷の範囲を拡大することが可能となる。また、流路70の長さは、弁体62が一方向へ移動することにより変化する構造であるため、負荷の変化に適切に対応した制動力を発揮することが可能となる。従って、回転モーメントの増加に対する動作時間の変化を非常に小さくすることが可能になる。さらに、量産した場合でも、弁機構として、個々の弁体62等の形状・寸法について高精度に加工し易いものを採用し得るため、歩留まりを向上させることが可能となる。

#### 【0030】

一方、図2において、軸20が反時計回り方向へ回転した場合には、非圧力室52内の粘性流体がペーン30に押圧されることにより、第2通路65を通じて作動室61内に流入する。この際、弁体62は、ばね63の力によって常態位置（無負荷のときに弁体62が存する位置）に復帰し、図1に示したように、小径部62bが作動室61の小孔部61bから完全に脱出した状態となっているため、流路70は形成されず、作動室61内の粘性流体は、第1通路64を通じて圧力室51内へ流入する。

## 【実施例 2】

### 【0031】

本実施例に係るロータリーダンバは、弁体 62 の形状が実施例 1 に係るロータリーダンバと異なる。すなわち、本実施例における弁体 62 は、図 7 に示したように、小径部 62 b にテーパ面 62 d が形成されている。

### 【0032】

本実施例によれば、弁体 62 の小径部 62 b が作動室 61 の小孔部 61 b に進入して行くに従って、小径部 62 b のテーパ面 62 d と小孔部 61 b の内周面との間に形成される流路 70 の面積を変化させることができる。具体的には、負荷が小さいときには、図 8 (a) に示したように、流路 70 の面積を大きくして、粘性流体の抵抗を小さくすることができる一方、負荷が大きいときには、負荷が小さいときよりも弁体 62 の小径部 62 b が作動室 61 の小孔部 61 b に深く進入するため、図 8 (b) に示したように、流路 70 の面積が小さくなり、これにより、粘性流体の抵抗を大きくすることができる。

### 【0033】

本実施例のように、弁体 62 にテーパ面 62 d を形成し、弁体 62 が一方向へ移動することにより、流路 70 の面積を変化させる構成でも、負荷の変化に対応した制動力を発揮することができ、従来のロータリーダンバよりも、制動特性を向上させることができる。

### 【0034】

なお、弁体 62 が一方向へ移動するに従って流路 70 の面積が小さくなるように、作動室 61 の周壁（小孔部 61 b の内周面）にテーパ面を形成してもよい。

## 【実施例 3】

### 【0035】

本実施例に係るロータリーダンバは、弁体 62 の形状が実施例 1 に係るロータリーダンバと異なる。すなわち、本実施例における弁体 62 は、図 9 に示したように、小径部 62 b に、弁体 62 が一方向へ移動するに従って流路 70 の面積が小さくなるように深さが調整された溝 62 e が形成されている。

### 【0036】

本実施例によれば、弁体 62 の小径部 62 b が作動室 61 の小孔部 61 b に進入して行くに従って、小径部 62 b の溝 62 e と小孔部 61 b の内周面との間に形成される流路 70 の面積を変化させることができたため、負荷が小さいときには、図 10 (a) に示したように、流路 70 の面積を大きくして、粘性流体の抵抗を小さくすることができる一方、負荷が大きいときには、負荷が小さいときよりも弁体 62 の小径部 62 b が作動室 61 の小孔部 61 b に深く進入するため、図 10 (b) に示したように、流路 70 の面積が小さくなり、これにより、粘性流体の抵抗を大きくすることができる。

### 【0037】

本実施例のように、弁体 62 に溝 62 e を形成し、弁体 62 が一方向へ移動することにより、流路 70 の面積を変化させる構成でも、負荷の変化に対応した制動力を発揮することができ、従来のロータリーダンバよりも、制動特性を向上させることができる。

### 【0038】

なお、弁体 62 が一方向へ移動するに従って流路 70 の面積が小さくなるように、作動室 61 の周壁（小孔部 61 b の内周面）に溝を形成してもよい。

## 【実施例 4】

### 【0039】

本実施例に係るロータリーダンバは、弁機構が隔壁 40 に設けられている点で、実施例 1 に係るロータリーダンバと異なる。すなわち、本実施例では、図 11 及び図 12 に示したように、作動室 61 、弁体 62 及びばね 63 を有して構成される弁機構が、2 つの隔壁 40 、40 にそれぞれ設けられている。ここで、弁機構の構造自体は、実施例 1 における弁機構の構造と同一である。本実施例のように弁機構を隔壁 40 に設けた場合でも、弁機構をベース 30 に設けた場合と同様の作用効果を奏することができる。

## 【実施例 5】

## 【0040】

本実施例に係るロータリーダンバは、弁体62の形状が実施例1に係るロータリーダンバと異なる。すなわち、本実施例における弁体62は、図13に示したように、小径部62bの先端において、外周面と端面とが交わるかどが、断面略弧状に面取りされている（以下、面取りされた部分を「アール」といい、図13乃至図16において、62fはアールである。）。

## 【0041】

本実施例によれば、負荷の大きさが変化しても、その負荷が所定値に達するまでは、弁体62の小径部62bが作動室61の小孔部61bに進入して行くに従って、小径部62bのアール62fの表面と小孔部61bの内周面との間に形成される流路70の面積を変化させることができる。

## 【0042】

具体的には、弁体62が一方向に移動して、その小径部62bが作動室61の小孔部61bに進入した当初には、小径部62bのアール62fの表面と小孔部61bの内周面との間に流路70が形成される（図14参照）。ここで、アール62fは、断面略弧状に形成されているため、負荷が小さいときには、図15（a）に示したように、流路70の面積を大きくして、粘性流体の抵抗を小さくすることができる一方、負荷が大きいときには、負荷が小さいときよりも弁体62の小径部62bが作動室61の小孔部61bに深く進入するため、図15（b）に示したように、流路70の面積を小さくして、粘性流体の抵抗を大きくすることができる。

## 【0043】

もっとも、流路70の面積が小さくなつた場合でも、流路70の長さは極めて短いから、同じ面積で流路70の長さが長いときよりも、粘性流体は流れ易くなる。従って、負荷が所定値に達するまでの低負荷の状態では、負荷の変化に対応した制動力を発揮するけれども、その制動力を総じて小さいものとすることが可能になる。

## 【0044】

一方、負荷が所定値以上のときは、弁体62の小径部62bが作動室61の小孔部61bにさらに深く进入して行くに従って、小径部62bの外周面と小孔部61bの内周面との間に形成される流路70の長さを変化させることができる。

## 【0045】

具体的には、負荷が所定値以上になると、弁体62の小径部62bが作動室61の小孔部61bにさらに深く进入して、小径部62bの外周面と小孔部61bの内周面との間に、流路70が形成される（図16参照）。そして、弁体62の移動距離は負荷の変化に対応して変化するため、流路70の長さも負荷の変化に対応して変化することになる。ここで、粘性流体は、流路70の長さが長くなる程、流れ難くなる。従って、負荷が所定値以上の高負荷の状態では、負荷の変化に対応した制動力を発揮するけれども、その制動力を総じて大きいものとすることが可能になる。

## 【0046】

よつて、本実施例によれば、制御対象物の回転モーメントが変化した場合でも、その動作時間の変動をより小さくすることが可能になる。

## 【0047】

上記した実施例1乃至5に係るロータリーダンバは、種々の製品に適用することが可能であり、特に回転モーメントが変化する制御対象物に対して、回転モーメントが変化した場合でも、その動作速度に差を生じさせないように制御することができるので、例えば、システムキッチンの収納棚の昇降動作、自動車のシートの昇降動作、リクライニングシートのシートバックの回転動作、蓋や扉等の開閉動作などを制御するために有用である。

## 【図面の簡単な説明】

## 【0048】

【図1】本発明の実施例1に係るロータリーダンバの内部構造を示す断面図である。

【図2】図1におけるA-A部断面図である。

【図3】実施例1において採用した弁体を示す図であり、(a)は正面図、(b)は右側面図である。

【図4】実施例1に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

【図5】実施例1に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

【図6】従来のロータリーダンバ(比較例)の制動特性と実施例1に係るロータリーダンバの制動特性を比較したグラフである。

【図7】本発明の実施例2において採用した弁体を示す図であり、(a)は正面図、(b)は右側面図である。

【図8】実施例2に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

【図9】本発明の実施例3において採用した弁体を示す図であり、(a)は正面図、(b)は(a)におけるA-A部断面図である。

【図10】実施例3に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

【図11】本発明の実施例4に係るロータリーダンバの内部構造を示す断面図である。

【図12】図11におけるA-A部断面図である。

【図13】本発明の実施例5において採用した弁体を示す図であり、(a)は正面図、(b)は(a)におけるA-A部断面図である。

【図14】実施例5に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

【図15】実施例5に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

【図16】実施例5に係るロータリーダンバの作用を説明するための図である。

#### 【符号の説明】

##### 【0049】

10 ケーシング

11 ケース本体

11a 外壁

11b 端壁

11c 内壁

11d 鑄部

11e 突起

12 蓋

12a 周壁

20 軸

20a 孔部

20b 溝

30 ベーン

40 隔壁

50 室

51 圧力室

52 非圧力室

61 作動室

61a 大孔部

61b 小孔部

62 弁体

62a 大径部

62b 小径部

62c 凸部

62d テーパ面

62e 溝

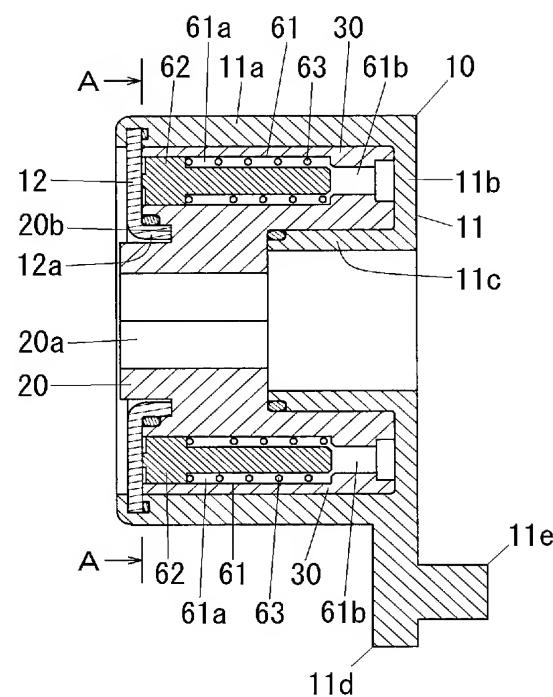
62f アール

63 ばね

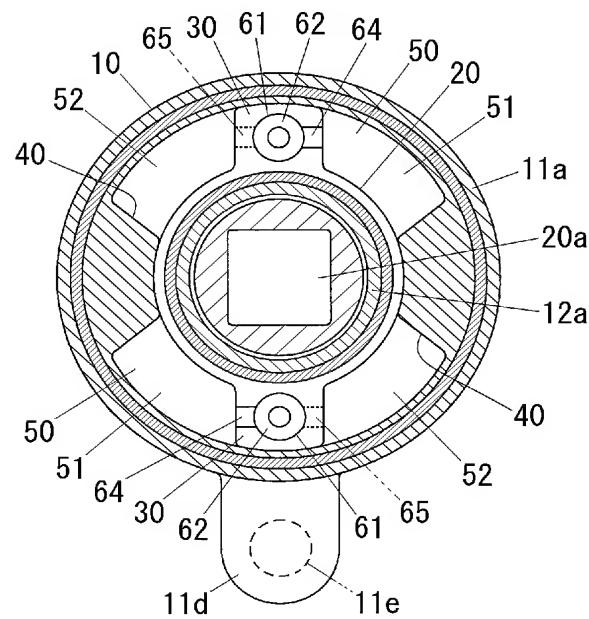
6 4 第 1 通路  
6 5 第 2 通路  
7 0 流路

【書類名】 図面

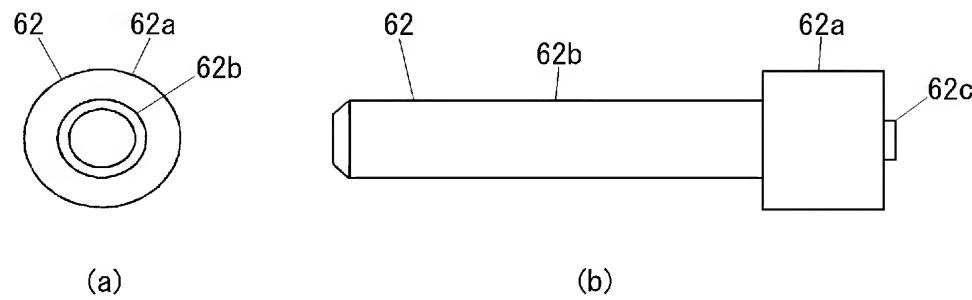
【図 1】



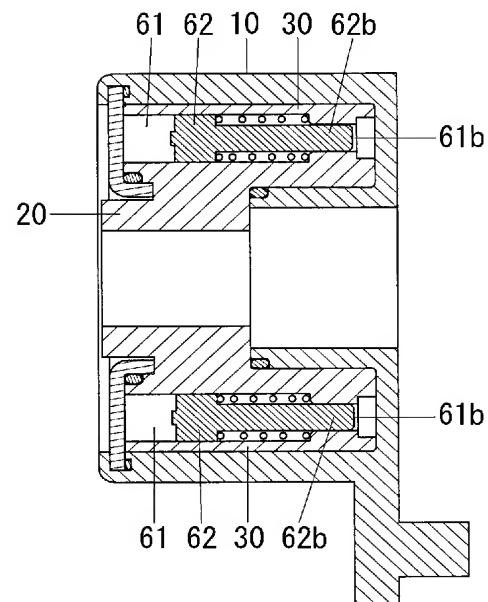
【図 2】



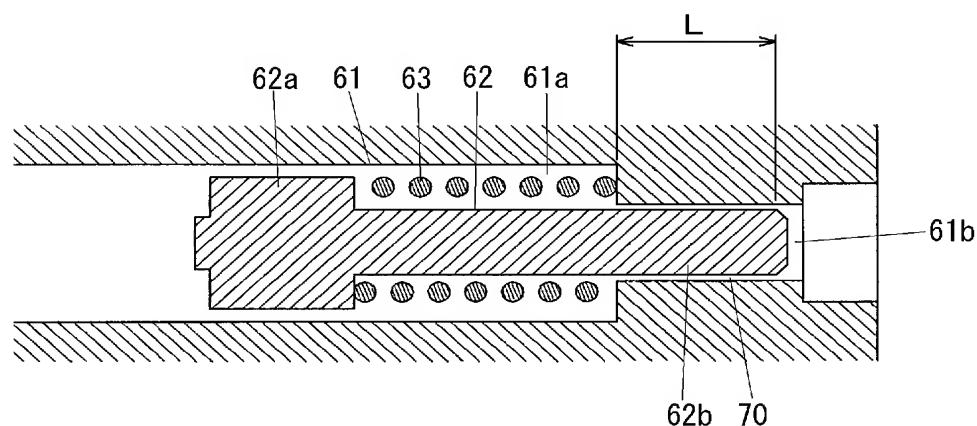
【図 3】



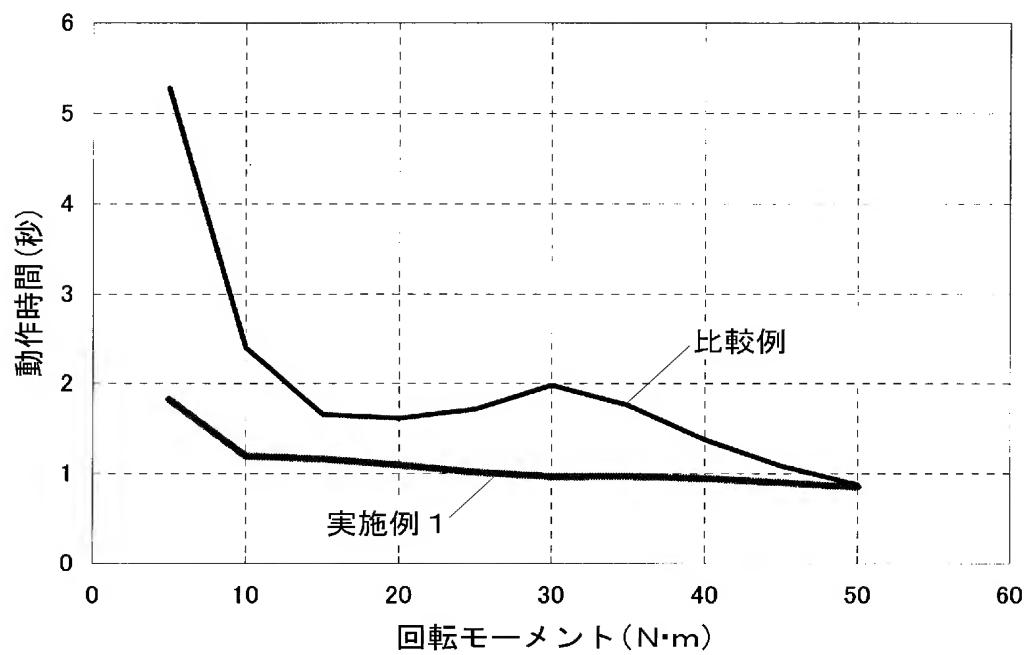
【図 4】



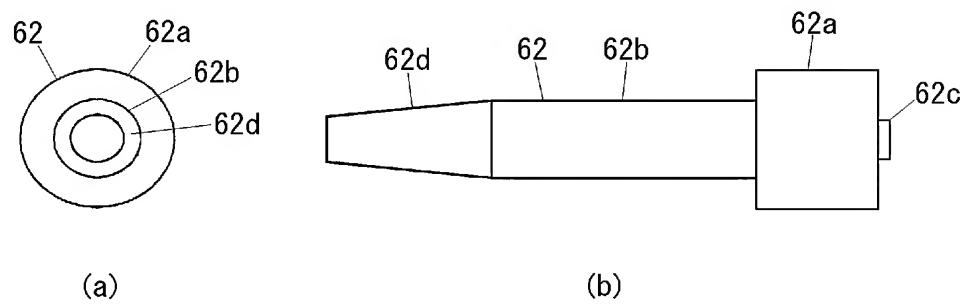
【図 5】



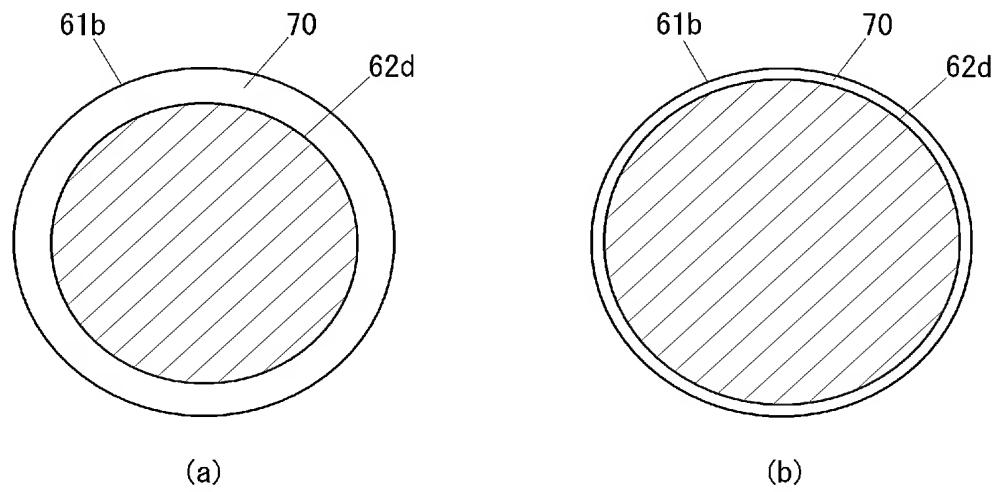
【図 6】



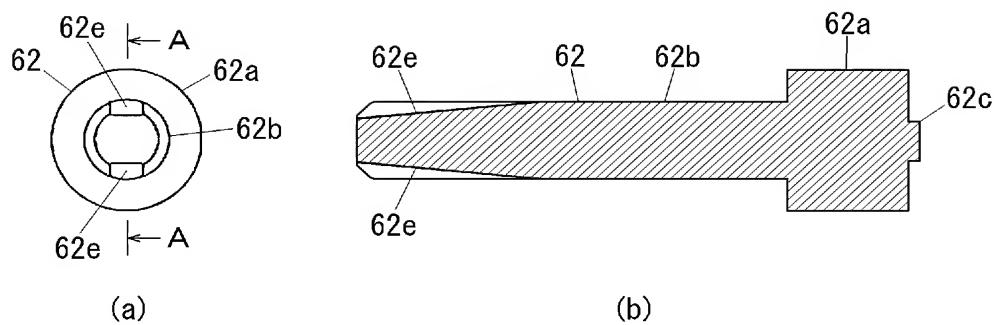
【図 7】



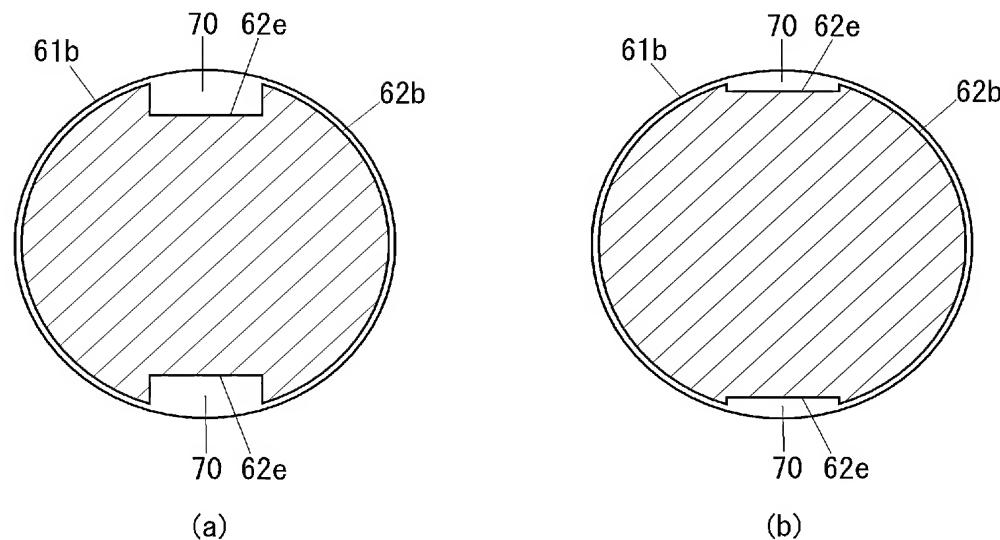
【図 8】



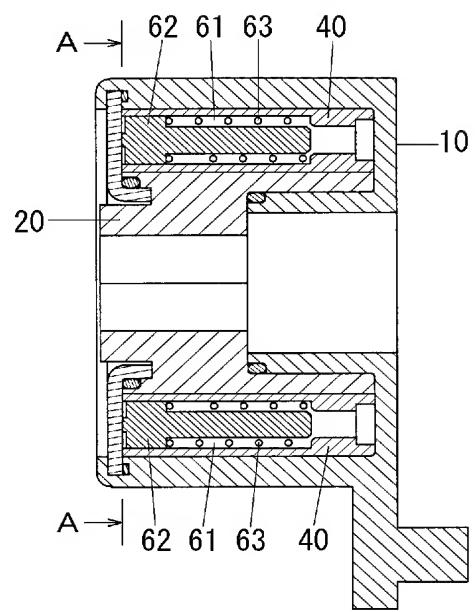
【図 9】



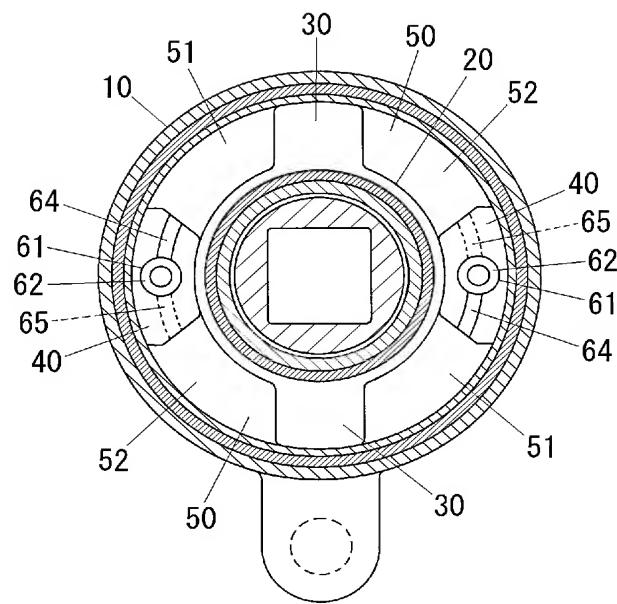
【図 10】



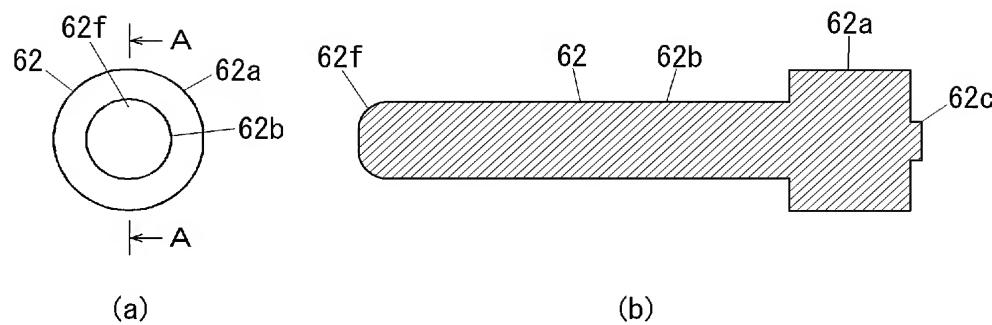
【図 11】



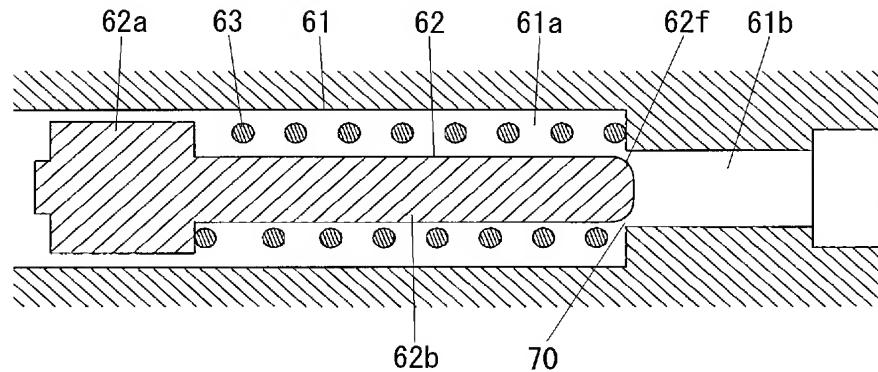
【図 1 2】



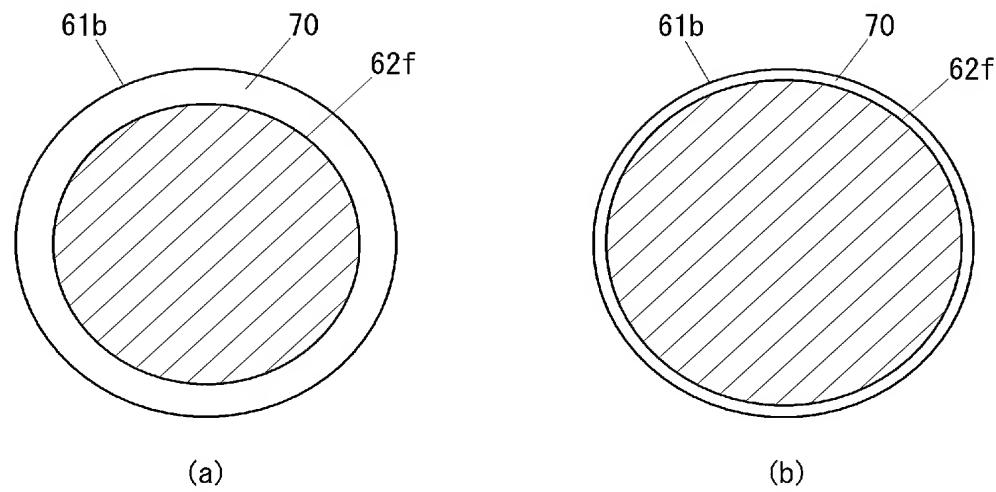
【図 1 3】



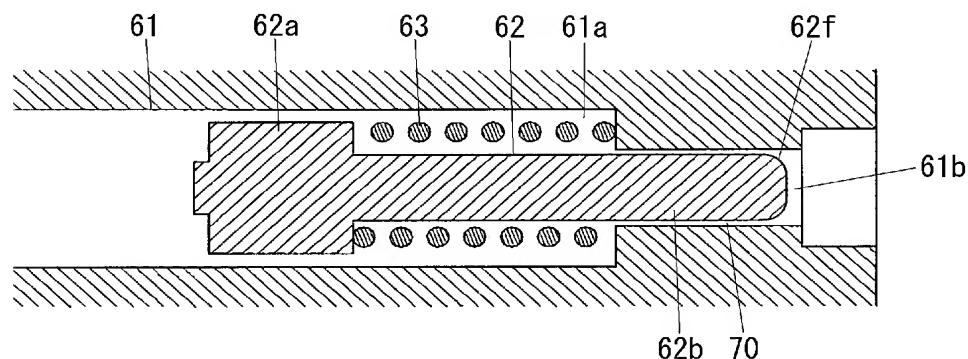
【図 1 4】



【図 1 5】



【図 1 6】



【書類名】要約書

【要約】

【課題】制動特性を向上させることができるロータリーダンバを提供する。

【解決手段】本発明は、粘性流体が充填されたケーシング10において、ケーシング10に対して相対的に回転し得る軸20と、軸20の周囲に設けられるペーン30とを有するロータリーダンバにおいて、ペーン30に、粘性流体が通過し得る作動室61と、作動室61内において移動し得る弁体62と、弁体62が一方向に移動するときに弁体62に制動力を付与するばね63とを有し、負荷の変化に対応して、弁体62と作動室61の周壁との間に形成される流路70の長さを、弁体62が一方向へ移動することにより変化させる弁機構が設けられていることを特徴とする。

【選択図】図1

出願人履歴

0 0 0 1 9 8 2 7 1

19910710

名称変更

東京都墨田区本所1丁目34番6号

株式会社ソミック石川